

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520383

研究課題名（和文）キエフルーシにおける文章語の成立と古教会スラブ語の影響

研究課題名（英文）The formation of the literary language of Kievan Rus' and the influence of Old Church Slavonic

研究代表者

佐藤 昭裕 (SATO AKIHIRO)

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：50135498

研究成果の概要（和文）：本研究はスラブ世界最古の文章語としての古教会スラブ語が、11 世紀～13 世紀の古ロシア文章語の成立に際してどのような影響を与えたか、テキスト言語学の見方から検討するものである。結果として、古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』に見える指示代名詞 *сь* 「近称」、*онь* 「遠称」、*тъ* 「中称」の分布、また「*онь же*+動詞」という構文の特徴的な使用が「マタイ」「マルコ」「ルカ」の 3 つの福音書、すなわち共観福音書にその起源を持つと考えられることが分かった。ギリシア語原典で共観福音書とは異なる文体的特徴を示す「ヨハネによる福音書」が果たした役割については、なお検討が必要である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project is to study the influence of Old Church Slavonic, the oldest Slavic literary language, on the formation of Old Russian literary language of 11th–13th centuries from the viewpoint of Text Linguistics. As the result of the study we came to the conclusion that the distribution of the demonstratives *сь* “this, *hic*”, *онь* “that, *ille*”, *тъ* “that, *iste*” and the specific use of the construction “*онь же* + Verb”, observed in the text of the Old Russian Chronicle “Tale of Bygone Years”, must have originated from the Old Church Slavonic translation of Synoptic Gospels. As for the problems concerning the stylistic peculiarities of the Gospel of John, we need further study.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：言語学、外国語（中・英・仏・独除く）、外国文学（中・英・仏・独除く）、『過ぎし年月の物語』、古教会スラブ語、指示代名詞、テキスト言語学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、キエフを中心とした 11 世紀～13 世紀ロシアの文章語について、その基層となった東スラブ語と、それに対するスラブ世界最古の文章語としての古教会スラブ語の

影響という観点から検討し、古ロシア文章語の性格と成立の事情を明らかにすることを目指すものである。

従来、古ロシア文章語、すなわちキエフ・ルーシ時代の書き言葉の起源と性格につい

ては、大きく 2 つの見方が対立していた。1 つはシャフマトフ等の唱える、古ロシア文章語は本質的に古教会スラブ語であり、それがロシア化したものであるとする説であり、いま 1 つはオプノルスキー等による、当時のロシアにはすでに東スラブ人本来の言葉に基礎をおく文章語が存在したとする説である。

この 2 つのいずれが正しいか、二者択一的に答えを求めることは容易ではないが、これらいずれの立場を取るにせよ、古ロシア文章語の成立・発展の問題を考えると、それに対する古教会スラブ語の影響という問題を切り離して論じることはできない。その際、従来の研究における議論の中心となったのは、まず語彙レベルの影響、借用という問題であり、それに関連して生じる音韻レベルの問題であった。

それに対して本研究は、テキスト・談話という観点から、テキストの構造と結束的なテキストを作り出すための種々の言語形式の使用に注意を向け、その分野における古教会スラブ語の影響を明らかにすることを目指すものである。

本研究以前に、研究代表者は、12 世紀初めにキエフにおいて成立した古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』のテキストの構造に注目し、「事実叙述」タイプと「コメント」タイプという 2 つのタイプのテキスト部分を区別し、動詞のテンス・アスペクト形式、語順、指示代名詞といった談話的な要素、結束的な構造を作るために用いられる要素の、それぞれのタイプのテキスト部分における特徴的な用法、分布を明らかにしてきた。

本研究では、そのような古ロシア文章語に見られる特徴が、東スラブ（古ロシア）において独自に成立したもののなのか、それともスラブ世界における最も古い文章語としての古教会スラブ語からの影響を受けて成立したもののなのか、もし影響関係があるとするれば、どのような形、どのような範囲で影響が与えられたのかを明らかにすることを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、キエフを中心とした 11 世紀～13 世紀ロシアの文章語の成立に際して、スラブ世界最古の文章語である古教会スラブ語が、どのような影響を与えたか、テキスト言語学の見方から明らかにすることを目的とする。

具体的には、12 世紀初めにキエフで成立した古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』の言語で区別される 2 つのタイプのテキスト、すなわち「事実叙述」タイプのテキストと「コメント」タイプのテキストのそれぞれに特徴的な (1) 動詞のテンス・アスペクト形式の使用、(2) 語順、(3) 指示代名詞 *сь* 「近称」、*онь* 「遠称」、*ть* 「中称」の使用、の 3 点について、

その特徴的な分布と使用が、古ロシア語（東スラブ語）において独自に成立、発展したもののなのか、それともすでに古教会スラブ語（9 世紀後半に成立）の段階で、類似の状況が存在し、それが古ロシア語にも影響を与えたのか、という問題を明らかにすることを旨とする。

その際、最も重要な資料となるのは、影響を与えた可能性を持つ側としては、9 世紀後半（860 年代）に成立した古教会スラブの 4 福音書ならびに、それよりも若干遅れて成立したと考えられる『キュリロス伝』『メトディオス伝』という 2 つの聖者伝であり、影響を受けた可能性を持つ側としては、上記の、12 世紀初めにキエフ・ルーシで成立した古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』である。

本研究は、(1) これらの文献のテキストの基本的構造を明らかにする、(2) 古教会スラブ語の諸文献のテキストにおいて、ロシアの年代記『過ぎし年月の物語』に見られるのと同じの、あるいは並行的なテキストのタイプを分けることができるか否かを明らかにする、(3) 結束的なテキストを作り出すための種々の言語形式の使用について、テキストのタイプとの相関関係、すなわちその分布を明らかにする、ことを目指す。その上で、(4) 古教会スラブ語の諸文献において古ロシア語の時代におけるのと類似の、あるいは並行する分布が観察されるか否かにもとづいて、古教会スラブ語から古ロシア語への影響関係の有無を明らかにし、あるいはその程度を判断することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、古ロシア文章語の成立に際しての古教会スラブ語の影響について、従来の語異論・音韻論・形態論における議論に対して、テキスト言語学の立場から検討することを目指すものである。従って、資料となる文献の内容に関わる精緻な読みが何より重要である。

使用する主要な文献は『4 福音書』『キュリロス伝』『メトディオス伝』『無名作者によるボリスとグレブの物語』『ザドンシチナ』等のスラブ、ロシア文献であり、これらの文献のテキストの構造を明らかにすることから出発した。

4 年間の研究期間の前半は主として『過ぎし年月の物語』の言語と、南スラブの聖者伝『キュリロス伝』『メトディオス伝』の言語の分析、比較を行い、後半は主として古教会スラブ語の規範としての新約聖書『4 福音書』の言語を『過ぎし年月の物語』の言語と比較した。

具体的には、次の 3 つの点から議論を進めた。(1) 古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』に見られるテキストのタイプの区別、すなわち「事実叙述」タイプ（通常の「語り

(narrative) タイプのテキストと一致する) と「コメント」タイプのテキスト「事実の総括」とそれに対する「評価」の両方を含む) の区別という考え方が、古教会スラブ語福音書テキスト、各種聖者伝テキストの分析にも有効であるかどうかを検証する。(2) 古教会スラブ語福音書、各種聖者伝におけるテキストのタイプと語順の分布の相関を明らかにする。(3) 古教会スラブ語福音書、各種聖者伝におけるテキストのタイプと指示代名詞の分布の相関を明らかにする。

その上で、最終的に、12世紀ロシアの文章語としての『過ぎし年月の物語』の文体が、ロシア(東スラブ)で独自に成立し発展したものなのか、他の古教会スラブ語の影響を受けて成立したものなのかを明らかにすることを目標とした。

4. 研究成果

本研究はスラブ世界最古の文字言語として9世紀に成立した古教会スラブ語が、11世紀～13世紀の古ロシア文章語の成立にどのような影響を与えたか、テキスト言語学の観点から明らかにしようとするものである。

4年間(繰越により最終的には5年間となった)の研究期間の前半は、主として古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』の言語と、南スラブの聖者伝『キュリロス伝』『メトディオス伝』の言語の分析、比較を行い、後半は『過ぎし年月の物語』の言語と古教会スラブ語の規範としての新約聖書『4福音書』の言語の比較を行った。これにより、次のような知見を得た。

(1) テキストのタイプについて、古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』に見られる「事実叙述」タイプと「コメントタイプ」の区別は、『キュリロス伝』『メトディオス伝』といった最古の南スラブ系聖者伝の分析についても有効であることを確かめた。その際、南スラブ系聖者伝の「事実叙述」タイプのテキストでは、古ロシア年代記におけるような様式化された語りのスタイルは観察されなかった。

(2) 古教会スラブ語福音書では、コメントタイプのテキストは存在せず、その代わりに「語り」のタイプのテキストと「説教」タイプのテキストを区別することが有効であることが分かった。

(3) テキストのタイプと語順の相関について、南スラブ系聖者伝においても、両者の相関関係の存在が確認された。ただし事実叙述タイプにおける語順は古ロシア年代記に比べより自由であること、すなわち古ロシア年代記の文体は、語順に関しては、南スラブ系聖者伝の伝統をそのまま引き継ぐものではないことも分かった。

(4) テキストのタイプと指示代名詞の分布

については、古教会スラブ語福音書の分析に力を注いだ。その結果、福音書では「説教」タイプのテキストと近称の指示代名詞 *сѣ* の使用が結びつき、「語り」タイプのテキストと遠称の指示代名詞 *онъ* の使用が結びついていること、これは古ロシア年代記に観察されるものと並行していることが分かった。

(5) 『4福音書』中における指示代名詞 *сѣ* 「近称」、*онъ* 「遠称」、*тѣ* 「中称」の使用についてより詳細に述べると、以下の点が明らかになった。① *сѣ* はギリシア語 *οὗτος* を翻訳し、「登場人物の会話」や「イエスの説教」中で直示的に使用される。また先行文脈中で語られた事件や事柄の内容を全体として指す用法も持つ。しかし明示的な先行詞を持つ使用例は少なく、その意味では照応形と呼ぶことはできない。② *онъ* はギリシア語 *ὁ δέ* を翻訳し、「*онъ* *же* + 動詞」という形で「語り」のテキストに現れる。先行する文に現れる斜格目的語を先行詞とする照応形である。③ *тѣ* はギリシア語 *αὐτός* あるいは *ἐκεῖνος* を翻訳し、テキストのタイプについて特別な分布を持たず、どのタイプのテキストにも現れる。照応形として先行詞をとるが、先行する文の主語が先行詞になるか斜格目的語が先行詞になるかについては制限がない。中立的な指示代名詞として、機能的には現代語の3人称の人称代名詞に最も近いと考えることができる。

(6) 上の(5)に示した結果は、従来代表者が、指示代名詞の使用に関して古ロシア年代記『過ぎし年月の物語』の言語を観察して得た結果に対応する。古教会スラブ語から古ロシア語への直接的な影響があったのか、何らかの語用論的な理由により、両言語がそれぞれ独自に同じ特徴を示すことになったのか、いずれかを証明し確定することは困難である。しかし古ロシア文章語が、古教会スラブ語よりも100年以上後に、その影響を受けて成立したことを考えるとき、この指示代名詞の使用、分布についても、古教会スラブ語から古ロシア文章語への影響があったと考えることが自然である。

(7) 一方で、古教会スラブ語福音書の中で、「マタイ」「マルコ」「ルカ」の3つ、すなわち「共観福音書」と「ヨハネ」では、問題の指示代名詞の現れ方が異なる点も観察された。これは基本的にはギリシア語原典における指示代名詞 *οὗτος*、*αὐτός*、*ἐκεῖνος* ならびに「*ὁ δέ* + 動詞」という表現の使用の違いに由来するものであるが、一部は古教会スラブ語への翻訳に際しての問題でもある。この点について、なお今後の研究が必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 佐藤昭裕. 「古教会スラブ語四福音書における指示代名詞 сь, опъ, тъ の主語としての使用について」『古代ロシア研究』23 (2013 年刊行予定) 査読あり.
- ② 佐藤昭裕. 「古ロシア語と古教会スラブ語における指示代名詞 сь, опъ, тъ について」『京都大学文学部研究紀要』50. 2011. pp.81-131. 査読なし.
- ③ A. Bobrov, 佐藤昭裕, 他「簡述編集版『ザドンシチナ』—テキスト・訳・訳注・索引—」『古代ロシア研究』22: 2010. pp.97-189. 査読あり.
- ④ Sato, Akihiro. “Стиль повествования древнерусской летописи «Повесть временных лет» и язык Житий Кирилла и Мефодия: опыт сопоставительного исследования.” *Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures*. 2008, pp.1-40. 査読あり.
- ⑤ Sato, Akihiro. “Структура текста Повести временных лет и шахматовская теория его формирования.” *Древняя Русь: вопросы медиевистики*. 33(3). 2008. pp.60-61. 査読あり.

[学会発表] (計 3 件)

- ① 佐藤昭裕. 「古ロシア語と古教会スラブ語 (OCS) の指示代名詞 сь, опъ, тъ の使用について」日本ロシア文学会関西支部秋季研究発表会、2010 年 12 月 4 日、京都産業大学
- ② Sato, Akihiro. “Struktura teksta Povesti vremennykh let i šachmatovskaja teorija ego formirovanija.” シャフマトフ記念国際会議、2008 年 10 月 22 日、モスクワ、ロシア科学アカデミー・国立人文大学
- ③ Sato, Akihiro. “Стиль повествования древнерусской летописи «Повесть временных лет» и язык Житий Кирилла и Мефодия: опыт сопоставительного исследования.” 第 14 回国際スラビスト会議. オフリド. ホテルメトロポール. 2008 年 9 月 10 日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 昭裕 (SATO AKIHIRO)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 50135498

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: